

Title	一橋大学における図書館と教員の協働・図書館職員と専門助手の協働
Author(s)	杉, 岳志
Citation	大学図書館研究(96): 16-22
Issue Date	2012-12
Type	Journal Article
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10086/25833
Right	

一橋大学における図書館と教員の協働・図書館職員と 専門助手の協働

杉 岳 志

抄録：図書館職員・専門助手・教員の役割に着目して、一橋大学における図書館と教員及び図書館職員と専門助手の協働を紹介する。一橋大学では2007年度に専門助手制度が導入され、以来、専門助手は図書館職員と教員の間存在的な存在として独自の役割を果たしてきた。情報リテラシー教育の分野では、専門助手は時には図書館職員、時には教員と同じ役割を担い、時にはいずれとも異なる役割を受け持った。学芸員資格科目では、専門助手は実習の講師を務めた。展示における図書館職員と専門助手の役割は年によって異なるが、2010年度の企画展示では図書館職員と専門助手がともに企画立案を行った。

キーワード：一橋大学附属図書館、協働、専門助手、情報リテラシー教育、博物館実習、展示

はじめに

2007年1月、一橋大学附属図書館は「専門助手」の公募を行った。募集要項に示された専門助手の職務内容及び募集人員は、次の通りであった。

- A 西洋社会思想史又は西洋経済（思想）史その他これに準ずる学問分野の専門的知識を活用し、特殊文庫・コレクション（大塚文庫等）の整理・修復・電子化・展示などに従事するほか、利用者に対し文献・情報探索、論文作法等の指導を行う者：1名
 - B 日本近世・近代史、日本経済史又は日本思想史その他これに準ずる学問分野の専門的知識を活用し、特殊文庫・コレクション（山中文庫、幸田文庫等）の整理・修復・電子化・展示などに従事するほか、利用者に対し文献・情報探索、論文作法等の指導を行う者：1名
- 筆者はこのうち、B枠で採用された専門助手である。

上記の募集要項に明記されているように、専門助手はコレクションの整理・修復・電子化・展示という所蔵資料を対象とする業務に加え、論文作法等の指導を担当している。専門助手は図書館員でありながら教育に携わる存在であり、その活動を紹介することは、図書館と教員の協働について考える上で無益ではないだろう。そこで本稿ではアクターを「図書館職員」「専門助手」「教員」の三つに分け、一橋大学における図書館と教員の協働及び図書館職員と専門助手の協働の事例を紹介することにしたい。

なお、本稿の内容はすべて筆者の個人的見解であり、一橋大学附属図書館（以下、当館）を代表するものではないことをあらかじめ断っておく。

1. 専門助手とは

本論に先立ち、一橋大学（以下、本学）における専門助手について簡単に説明しておこう。

専門助手とは、一言で言えば専門的知識をもって図書館業務に従事する研究者である。「一橋大学における専門助手に関する規則」（平成19年規則第26号）では、専門助手は次のように定められている。

専門助手とは、高度の専門性を持ち、他の補助業務のものでは代替不可能な補助業務について設ける職種で、大学院博士後期課程を修了した者又はこれと同等以上の専門的知識、技術又は経験を有する者をいう。（第2条）¹⁾

ここから、専門助手の特徴として次の2点を指摘できる。1点目は、必要な資格である。専門助手に必要なのは博士号ないしそれに匹敵する専門的知識、技術、経験であり、司書資格の有無は問われていない。2点目は、その位置付けである。専門助手は専門的な補助業務の遂行者として、学内外の研究者や学生の研究を補助することが求められている。専門助手のポスト自体は教員ポストだが、研究職ではなく、勤務時間内に図書館業務外の研究を行うことは原則として認められていない。また、助教とは異なり、授業を担当することはできない。

規則には記されていないが、専門助手をめぐる制度上の特徴としてはもう1点、事務組織の中に組み込まれたという点が挙げられる。当館の専門助手は、ポストが新設された2007年4月から一貫して附属図書館長直属である。しかし、2007年4月から2012年3月までの5年間は、そこから学術・図書部へ出向し、学術情報課学術・企画主担当に配属される形をとっていた²⁾。この措置により、専門助手に対する命令権は学術情報課長が有することにな

り、専門助手は「先生」扱いされることなく他の図書館職員と同様に図書館業務に従事した。この点については様々な評価があるだろうが、筆者は、図書館職員と専門助手が協働する前提となる重要な措置であったと考えている。

2. 情報リテラシー教育

当館が教員ともっとも緊密に連携してきたのは、情報リテラシー教育の分野である。まずはこの分野での協働を紹介しよう。

2.1 レポート・論文の書き方相談事業

当館は2010年以来、本学大学教育研究開発センターと共同でレポート・論文の書き方相談事業を行ってきた。当館と同センターは本事業の構想段階から協議を重ねており、本事業は図書館と教員の協働事業として第一に挙げるべきものである。

本事業の嚆矢は、2010年7月14日から16日にかけて計3回開催したレポート・論文の書き方相談会である。内容は各回とも同じで、前半にレポートの書き方に関するレクチャー、後半に個別相談会を実施した。レクチャーは大学教育研究開発センター教員、個別相談会は、テーマ設定や文章の構成については大学教育研究開発センター教員・附属図書館専門助手・アルバイトの博士後期課程大学院生、文献収集と引用の方法については図書館職員が担当した。参加者は計13名であった。

同年12月には、レポート・論文の書き方相談会を開催するとともに、相談カウンターを開設して利用者の相談に応じた³⁾。相談会は回数を前回よりも1回減らして2回とし、第1回に大学教育研究開発センター教員によるレクチャーとグループワーク、第2回にレクチャーと個別相談会を行った。個別相談会では、教員・専門助手・大学院生と図書館職員がそれぞれ7月と同じ役割を担った。参加者数は伸び悩み、第1回が2名、第2回が6名であった。

相談カウンターは12月2日からおよそ2か月にわたって当館内に設置され、相談員の博士後期課程大学院生が平日の13時から17時まで常駐した。相談員不在の時間については、当館専門助手が対応することとした。期間を通じて相談に訪れた利用者は計9名であった。

2011年度は7月と1月にそれぞれ2回、レポートの書き方講習会を当館研修セミナー室で開催した⁴⁾。この時は2010年度の相談事業で判明した課題を踏まえ、①「教員が語る：教員が期待するレポートとは」、②「先輩が語る：3・4年生のレポート体験記」、③「どうやって書くか?：大学院生等に

よるレポートの書き方個別相談会」の3部構成とした。①の「教員が語る」は学部教育を担当されている教員、②の「先輩が語る」は学部後期課程在籍の学生に協力を依頼し、望ましいレポートとはどのようなものか、高い評価を得たレポートをどのように作成したかをそれぞれお話しいただいた。

図書館職員及び専門助手（以下、両者を合わせて「図書館員」とする）は実施にあたって大学教育研究開発センター教員と事前協議を重ね、当日は専門助手が③の個別相談会で博士後期課程の大学院生とともに相談員を務めた。参加者は7月が計20名、1月が計21名であった。



図1 2011年度冬学期レポートの書き方講習会の様子

2012年度は、大学教育研究開発センター及び図書館と参加する学生の双方の負担をできるだけ軽減しつつ、レポート執筆に必要な最低限の知識を学生に伝えたいと考え、内容をレポートの書き方に関するレクチャーに絞って開催した。時間は学生が集まりやすいと考えられる昼休みに設定し、会場はこれまで用いていた当館研修セミナー室から、学部前期課程の授業が多く開講される東キャンパスの教室に変更した。

レクチャーは、レポートの書き方に関するものを3回、資料の探し方に関するものを2回実施した。前者の担当は附属図書館の専門助手2名と大学教育研究開発センターの教員1名、後者の担当は図書館職員2名である。前者については、講師の専門に合わせて参加する回を選べるようにそれぞれの専門をポスターに明記した。参加者の人数は前者が3日間で52名、後者が2日間で18名であった。

レポート・論文の書き方相談事業に参加する学生の数は年々増加し、2012年にはのべ70名の参加者を得た。これは事後検討会で浮かび上がった課題を改善し続けた成果であり、担当者の一人として素直に喜ぶたい。しかし70名という数字は1学年約1,000人の7%であり、いまだ満足すべきものとは



図2 2012年度夏学期レポートの書き方講習会ポスター

言い難い。2012年度講習会の参加者アンケートで「役に立たなかった」を選んだ学生はおらず、レポート・論文執筆指導に対する需要が存在するのは確実である。潜在的な需要の喚起と満足度の向上に図書館がどのような役割を果たせるのか、今後も試行錯誤を重ねることになるだろう。

2.2 学生生活の技法

次に、2009年度冬学期の開講当初から当館が携わってきた「学生生活の技法」という授業について紹介したい。この授業は学生のソーシャルスキルならびにアカデミックスキルの向上を目的とするもので、複数の教員によって分担されている。当館が関係するのは、大学教育研究開発センター教員担当の、レポート執筆をテーマとする3コマである。

関与の仕方は年度によって若干変化しているが、基本的には、①レファレンス主担当主査（2012年8月よりレファレンス係長）による文献収集や引用の作法等に関する講義（1/2コマ×2回）と、②10名前後の図書館員によるグループワークの補助（1コマ×1回）を行っている。

②のグループワークは、学生を六つ程度のグループに分け、グループ内で互いのレポートを批評するというものである。その目的はレポート執筆の「型」を身に付けることにあり、批評はレポートの内容の是非ではなく構成や体裁について行う。自分のレポートを他人のレポートと比較できるこのグループワークは学生の評価が高く、シラバスには「グループワークが面白かった」「他人のレポートの回し読みがよかった」といった過去の受講生の声が紹介されている⁵⁾。

グループワークに際して図書館員は、「このレポートが立てた問いは何か」「問いに対する答えは何か」「どのようにして問いに対する答えが導かれているか」と学生たちに問い掛け、円滑かつ活発な議論を促す役割を担う。発言は学生に任せるのが原則だが、図書館員は議論をコントロールし、行き詰ってしまった時などは軌道修正しなくてはならない。

以上の役割を果たすにあたって図書館員に要求されるのは、これまで日常の図書館業務では求められることのなかったファシリテーターのスキルである。そのため開始当初は、専門助手はともかく図書館職員には荷が重いという声が聞かれた。しかし筆者の見るところ、そのように感じていた図書館職員も回を重ねることで次第に慣れ、初めて担当した時ほどの負担は感じなくなったようである。グループワークの目的は学生のアカデミックスキル向上であり、前述の通り学生たちから高い評価を得ている。その一方で、このグループワークは図書館職員のファシリテーションスキル向上という副次的効果をもたらしたといえよう。

2.3 附属図書館ガイダンス

前2項はいずれも図書館と教員の協働事業であった。次に、図書館職員と専門助手が協働した事例として、当館のガイダンスを紹介しよう。

当館では定期的なガイダンスを4月と10月に開催している。4月に開催するのは、専門助手による卒論・修論の書き方ガイダンスと図書館員による情報検索ガイダンスである。両ガイダンスは、前者が卒論・修論執筆の心構えを説く導入編、後者が卒論・修論執筆に必要な文献の収集方法を紹介する実践編という関係にある。

前者はもともと、「レポート・論文の書き方」と題する学術的文章作成の概説であった。しかし、レポート執筆を念頭に参加する学生はほぼ皆無だったこと、卒業論文や修士論文執筆の具体的な体験談を聞きたいという声がアンケートに多く寄せられたことから、内容を卒論・修論の書き方に限定することとした。現在は、卒業論文・修士論文執筆の体験談を交えつつ、テーマの絞り込み方や提出までのスケジュールの立て方、執筆に際しての注意点などをアドバイスしている。

10月のガイダンスは卒業論文を抱えた4年生を対象を限定し、「そろそろ卒論を書き始めないとヤバイと思っている方へ」と題して開催している。内容は、学術的文章作成の概説と文献収集の個別相談である。こちらは専門助手と図書館職員の役割分担は行わず、共に個別相談を担当している。

3. 学芸員資格科目

2009年に改正された博物館法施行規則が2012年4月に施行され、「博物館実習」の科目は、学内で行う「学内実習」と博物館法で規定された登録博物館または博物館相当施設で行う「館園実習」で構成されることになった。これを受け、当館は学芸員資格科目の教員と協働し、博物館実習の一部を担当した。

当館での実習は、閉架式の貴重資料室の見学と和装本の綴じ直しの2本立てとした。貴重資料室の見学では、当館所蔵の貴重資料を紹介するとともに、当館における資料保存の取り組みを説明した。和装本の綴じ直し実習は、筆者が用意した資料を用い、綴じ糸を外して綴じ直すという作業を順番に行った。



図3 和装本綴じ直し実習の様子

博物館資料保存論を担当する教員からも協力の要請があり、博物館実習と同様に貴重資料室の見学と和装本の綴じ直し実習を行った。こちらの授業の受講生たちは後に見学レポートを提出しているが、その多くが当館の資料保存業務に字数を費やしていた。日常的な環境のチェックといった地道な作業が、学生たちにはとりわけ印象深かったようである。

4. 展示

当館は2001年に展示室を開設し、以来各種展示を開催してきた。2012年現在、展示の年間スケジュールは①ホームカミングデー記念展示（5月上旬）、②日・EUフレンドシップウィーク展示（5月中～下旬）、③オープンキャンパス特別資料展示（8月上旬）、④企画展示（11月上旬）、⑤常設展示（年1～2回入れ替え）となっている⁶⁾。

上記5種類の展示のうち、もっとも労力と時間が必要となるのが、学園祭（一橋祭）に合わせて開催

する企画展示である。筆者は2008年と2010年に企画展示を担当したが、この両者は対照的な取り組みとなった。順を追って紹介することにしよう。

4.1 2008年度企画展示

2008年度の企画展示は、企画立案を筆者が行い、実務は附属図書館専門助手2名（筆者を含む）・社会科学古典資料センター専門助手2名・図書館職員6名の計10名で構成される展示ワーキンググループで分担した。専門助手が着任した2007年度より、企画展示は附属図書館専門助手2名が交互に担当することになっており、筆者はこの年に初めて担当した。ワーキンググループのメンバー10名のうち、附属図書館専門助手2名・社会科学古典資料センター専門助手1名と図書館職員3名が前年度に引き続いてのメンバー、社会科学古典資料センター専門助手1名と図書館職員3名が2008年度の新規メンバーであった。

複数の企画案を検討した結果、2008年度の企画展示は「福田徳三とその時代—日本における経済学の黎明—」と題し、当館所蔵資料を用いて日本における経済学の先駆者福田徳三を紹介することになった。福田は本学の歴史、さらには日本における経済学の歴史を語る上で欠かすことのできない人物であるが、それまで展示で正面から取り上げたことはなかった。

企画展示に際しては例年学内の教員にアドバイスをお願いしており、この年は西沢保一橋大学経済研究所教授にご教示を仰いだ。また、福田に関する調査に長年にわたって従事してこられた当館元職員の金沢幾子氏に、福田に関する資料について多大なご教示をいただいた。お二人のおかげで展示は小規模ながらも充実した内容となり、来場者数はそれまでの企画展示の記録を300名近く上回る1,623名に上った。

4.2 2010年度企画展示

2008年度の企画展示の後、展示の実施体制が一新された。専門助手：企画立案／図書館職員：実施作業という2008年度企画展示の役割分担の是非を展示ワーキンググループ内で検討した結果、展示が通常業務を圧迫することへの懸念はあるものの、所蔵資料に関する知識の蓄積という観点からも、また職員のスキルアップという観点からも、ワーキンググループのメンバーも企画立案に参加することが望ましいという結論に至ったためである。

数度にわたる検討の末、新たな体制は次の通りとなった。

- ①展示ワーキンググループは附属図書館専門助手 2 名, 社会科学古典資料センター専門助手 2 名, 学術情報課学術・企画主担当主査(学術情報課課長代理が兼務) 1 名, 図書館職員 6 名の計 11 名で構成する。
- ②専門助手 1 名と図書館職員 2 名からなる班を展示ワーキンググループ内に三つ作り, それぞれ日・EU フレンドシップウィーク展示 (5 月), 企画展示 (11 月), 常設展示 (7 月・12 月) の企画立案を行う。班長は専門助手が務めるが, 社会科学古典資料センターの専門助手は企画展示を担当しない。
- ③学術・企画主担当主査は毎年企画展示の事務方を担当する。
- ④実施作業は全館体制で行う。

班長と図書館職員の組み合わせは固定せず, 順次組み替えることとした。専門助手の数と班の数が一致しないこと, 社会科学古典資料センターの専門助手は企画展示を担当しないこと, 異なる班長と組んだ方が図書館職員の得るものが大きいと考えたことがその理由である。各班の組み合わせと担当する展示は, 次の通りとなった。

表 1 展示担当表

	2009 年度	2010 年度	2011 年度
A 班	企画 (図①)	常設 1 (古②) 常設 2 (図①)	EU (古②)
B 班	EU (図②)	企画 (図②)	常設 1 (図②) 常設 2 (古①)
C 班	常設 1 (古①) 常設 2 (古②)	EU (古①)	企画 (図①)

※図①・図②と古①・古②はそれぞれ, 班長を務める附属図書館専門助手と社会科学古典資料センター専門助手を表す。筆者は図②である。

この新たな体制の下で, 展示ワーキンググループのメンバーは展示の企画立案に大きく関与することになった。その具体的様相を, 筆者が班長を務めた 2010 年度企画展示を事例にみてみよう。

2009 年 5 月, 新たな体制で動き出した直後に筆者の所属する B 班は最初の会合をもち, ①「江戸の商業」を大まかなテーマとすること, ②各自の関心に沿って, 資料の調査を順次進めること, ③月 1 回のペースで打ち合わせを行うこと, の 3 点を決定した。また, 教員のアドバイスは仰がず, 日本近世史を専門とする筆者が内容に責任を持つこととした。

企画案を練るのと並行して, 当館所蔵資料をテキ

ストとする古文書の勉強会を開催し, 所蔵資料の調査と図書館職員のくずし字読解能力向上を図った。当初は 90 分×月 1 回のペースで行ったが, 展示開催のおよそ 1 年前となる 2009 年 10 月より 60 分×月 2 回とした⁷⁾。

その後 2010 年 2 月にタイトルを「大江戸商売繁盛記―所蔵貴重資料から―」と決定したが, 4 月に班内の分担を見直さざるを得なくなった。人事異動により, 班員の図書館職員のうち 1 名が展示に十分な時間を割けなくなったためである。それとほぼ同時に慶應義塾図書館から展示共同開催の申し入れがあり, 検討の結果, 筆者・当館職員 1 名・慶應義塾図書館の 3 者で企画立案を行うことになった。

両館の分担は, 当館が 7 ケース, 慶應義塾図書館が 2 ケースとした。当館分の内訳は, 筆者が 4 ケース, 図書館職員が 3 ケースである。各ケースのテーマは話し合いの中で調整したが, 基本的には担当者の関心に基づいて設定した。

表 2 2010 年度企画展示ケース担当表

ケース番号	ケースタイトル	担当
1	札差事略	筆者
2	札差株仲間	筆者
3	札差青地家	筆者
4	米の流通	当館職員
5	江戸の風景と物流	慶應義塾図書館
6	江戸時代の貨幣	慶應義塾図書館
7	魚市場	当館職員
8	海運	当館職員
9	木綿店の資料から	筆者

企画展示を班の体制で実施する主眼の一つは図書館職員の育成であったことから, 当館職員担当分の解説文は随時書き直してもらった。通常業務を抱えながらの調査と原稿執筆, そして書き直しはかなりの負担だったと想像されるが, その甲斐あって出来上がった解説文は大変充実したものとなった。完成版の解説文は現在も当館ウェブサイトにて公開しているので, 関心のある方は参照されたい⁸⁾。

人事異動による班内の分担見直しを余儀なくされたものの, 2010 年度の企画展示は概ね理想的な形の協働となった。しかし通常業務と展示の兼ね合いという問題はくすぶり続け, 展示ワーキンググループは 2012 年 3 月をもって解散された。筆者が現在担当中の 2012 年度企画展示は, 2008 年度と同様, 筆者が単独で企画立案している。しかし図書館職員も展示に関与すべきとの声も根強く, 2012 年度中に新たな体制が発足する見込みである。

おわりに

本稿は、図書館職員・専門助手・教員の役割に着目して、一橋大学における図書館と教員の協働を概観した。本稿で取り上げた三つの事例で各アクターの担った役割を整理すると、下記の通りとなる。

表3 図書館職員・専門助手・教員の役割の組み合わせ

図書館職員／専門助手／教員	2010年度・2011年度 相談事業
図書館職員／専門助手+教員	2012年度相談事業
図書館職員+専門助手／教員	学生生活の技法
図書館職員／専門助手	春季図書館ガイダンス・ 展示
図書館職員+専門助手	秋季図書館ガイダンス
専門助手／教員	学芸員資格科目

※「+」でつながれるアクターは同じ役割,「/」で区切られるアクターは異なる役割を演じたことを示す。

図書館職員と教員の間接的存在である専門助手は、時に互いの強みを生かす形で図書館職員と役割を分担し、時に同じ役割を担うことで図書館の活動の幅を広げてきた。ここで紹介したのは専門助手の活動の一端に過ぎないが、図書館が研究者を抱える専門助手制度の持つ可能性は披露できたのではないかと思う。

図書館と教員の協働は、伝統的な枠組みの下では解決が見込めない問題に対処するための取り組みである。したがってその取り組みは新規の業務であり、担当者の負担が増大することは避けられない。こうしたことから、協働に対する不満や不安が生じるのは想像に難しくなく、当館でも展示が通常業務を圧迫するとの声やグループワークの進行役は荷が重いとの声が聞かれた。

しかし、協働は図書館とその職員に様々な副次的効果をもたらすという側面を含めて総合的に評価されるべきであろう。グループワークを通じた図書館職員のファシリテーションスキルの向上はすでに指摘したところであるが、本稿の事例に即せば、博物館実習を通じた図書館の取り組みに対する学生の理解の深化や、展示の解説文執筆を通じた図書館職員

の文献調査スキルと文章執筆スキルの向上、展示の企画立案を通じた展示の構成能力、ひいてはプレゼンテーションスキルの向上なども副次的効果として挙げられる。また、学内での図書館のプレゼンス向上も、教員との協働の副次的効果の一つとして指摘してよいだろう。月並みな結論ではあるが、通常業務とのバランスを勘案しつつ、積極的に協働に乗り出すことが、中長期的には図書館を支えることになるものと思われる。

注・参考文献

- 1) 一橋大学. “一橋大学における専門助手に関する規則”. (オンライン), http://www.hit-u.ac.jp/dlw_reiki/41990210002600000000/41990210002600000000/41990210002600000000.html, (参照 2012-8-31).
- 2) 2012年4月以降は新たに設置された附属図書館研究開発室の所属となり、事務組織の指揮命令系統から外れている。
- 3) 2010年12月のレポート・論文相談事業については、次の文献を参照。朴澤泰男, 「レポート・論文の書き方」相談事業. 一橋大学大学教育研究開発センター年報. 2010, 2010年度, p. 37-40.
- 4) 2011年度レポート・論文相談事業については、次の文献を参照。朴澤泰男, 「レポート・論文の書き方」相談事業. 一橋大学大学教育研究開発センター年報. 2011, 2011年度, p. 29-32.
- 5) 「国立大学法人一橋大学学務情報システム Mercas」にて閲覧。 <https://mercas.hit-u.ac.jp/> (参照 2012-8-31).
- 6) 詳細については一橋大学附属図書館のウェブサイトを参照されたい。一橋大学附属図書館. “公開展示”. (オンライン), <http://www.lib.hit-u.ac.jp/pr/tenji/>, (参照 2012-8-31).
- 7) 余談ではあるが、勉強会は今日に至るまで継続して実施している。
- 8) 一橋大学附属図書館. “平成22年度一橋大学附属図書館・慶應義塾図書館共同企画展示「大江戸商売繁盛記：所蔵貴重資料から」”. (オンライン), <http://www.lib.hit-u.ac.jp/pr/tenji/kikaku/2010/>, (参照 2012-8-31).

< 2012.10.10 受理 すぎ たけし 一橋大学附属図書館専門助手 >

Takeshi SUGI

Library Specialist as the Linchpin in Faculty and Library Collaboration

Abstract : This paper provides the library specialist's role in serving as the linchpin for library faculty collaboration. In 2007 Hitotsubashi University introduced a library specialist system, and since then the library specialist has fulfilled its unique role as a hybrid between faculty member and library staff. In the case of information literacy education, the library specialist would sometimes play the same role as the library staff, sometimes the same role as the faculty member, and sometimes entirely different roles on behalf of both. In the case of the curator certification course, the library specialist served as the instructor. The role of the library specialist in arranging for exhibitions has differed each year, but the library staff and library specialist worked together to plan the special exhibition of the year 2010.

Keywords : Hitotsubashi University / collaboration / library specialist / information literacy education / museum practicum / exhibitions